

看護学生の看護のイメージと特性的自己効力感との関連 —学年間の比較—

本間夏子、澤村梨香子、佐藤信枝
新潟医療福祉大学 看護学科

【背景・目的】特性的自己効力感とは人の行動を予測し、制御するうえで重要なものと考えられており、臨床や教育の場において特性的自己効力感を高めるようなアプローチは、学生の行動修正に有効である。本研究における「看護のイメージ」とは、職業的アイデンティティを形成する一要因として学生が専門的に看護を学ぶ過程で、現実的・経験的・直感的に反映された看護に対する考えや態度とする。先行研究では、学生の看護のイメージは学年進行とともに低下する、実習後は肯定的イメージに変化するという報告がある。特性的自己効力感では、実習後に向上する、学年進行による変化はないという報告がある。以上のように看護のイメージと特性的自己効力感についての研究は多くあるが、その特徴は明らかになっていない。

本研究では、実習や授業などの看護のイベントが、看護のイメージや特性的自己効力感にどのように影響を与えるのか、看護のイメージと特性的自己効力感の学年比較を行いその特徴を明らかにする。その上で、看護のイメージと特性的自己効力感との関連について検討することは、特性的自己効力感向上に対して有効な支援に繋がると予測できる。

【方法】1. 調査対象

本学看護学科 1~4 年生 356 名

- 1) 1 年生：教養科目群と看護専門科目の看護学のベースとなる概論の他、基礎看護技術に関する演習を含む授業が主体である。
- 2) 2 年生：看護専門科目の各看護学専門領域の概論を履修し、1 年生後期に基礎看護学実習 I を終了している。
- 3) 3 年生：各看護学専門領域の各論の講義と 2 年次の基礎看護学実習 II を終了しており、後期から専門領域看護学実習が開始される。
- 4) 4 年生：3・4 年時の専門領域看護学実習と統合実習を終了している。

2. 調査方法

本研究はアンケート調査で、次の 2 つの尺度を採用した調査項目である。

- 1) 看護のイメージ：Osgood (1952) の意味微分法を採用した 32 項目
- 2) 特性的自己効力感：成田ら (1995) の特性的自己効力感尺度を採用した 23 項目

【結果】1. 調査対象

看護学生 1~4 年生の合計 343 名の学生にアンケート用

紙を配布した結果、合計 315 名から回答を得て (有効回答率 91.8%)、これを分析対象とした。内訳は 1 年生 85 名 (98.8%)、2 年生 77 名 (83.7%)、3 年生 74 名 (92.5%)、4 年生 79 名 (92.9%) であった。

2. 看護のイメージと学年比較

看護のイメージに関する SD 法 32 項目の項目平均値と標準偏差値を算出した。全体的に 4 点以上の肯定的なイメージ傾向にあった。学年間で比較すると全項目の平均値は、1 年生が最も高く、学年進行に伴い低下した。因子別にみると最も低い因子は、4 年生の「温かい」・「親切的な」・「優しい」などの人間的な内面性に関するイメージで、次に 3 年生の「好きな」・「おもしろい」「魅力的な」・「楽しい」などの職業的魅力に関するイメージであった (表 1)。

表1 看護のイメージ因子の学年比較

| | | n=315 | | | |
|------|--------|-----------|------|------|------|
| | | 1年生 | 2年生 | 3年生 | 4年生 |
| 第Ⅰ因子 | 社会的価値 | Mean 6.25 | 6.14 | 5.89 | 5.92 |
| | | SD 0.94 | 0.92 | 1.01 | 1.01 |
| 第Ⅱ因子 | 職業的専門性 | Mean 5.85 | 5.70 | 5.58 | 5.41 |
| | | SD 1.10 | 1.12 | 1.06 | 1.06 |
| 第Ⅲ因子 | 職業的魅力 | Mean 5.90 | 5.28 | 5.16 | 5.33 |
| | | SD 0.99 | 1.20 | 1.26 | 1.24 |
| 第Ⅳ因子 | 人間的内面性 | Mean 5.77 | 5.35 | 5.19 | 5.01 |
| | | SD 1.26 | 1.44 | 1.43 | 1.28 |
| 全項目 | | Mean 5.96 | 5.68 | 5.51 | 5.47 |
| | | SD 1.09 | 1.21 | 1.22 | 1.82 |

3. 特性的自己効力感と学年比較

特性的自己効力感尺度 23 項目の個人得点の素点の合計から平均値と標準偏差値を算出した。平均値は 1 年生が最も高く、次いで 2 年生、3 年生の順で低下し、4 年生で上昇した。

【考察】看護のイメージは、1 年生が最も肯定的であり、学年進行に伴い低下するという結果が得られた。看護のイメージが学年進行に伴い低下するのは、入学後の授業や実習が影響し、憧れの段階から現実の厳しさを直視した反応であると推測される。

特性的自己効力感は、1 年生が最も高く、2 年生、3 年生の順に低下するが、4 年生で再び上昇した。1 年生は大学入学という達成感や、今後への期待などが特性的自己効力感を高める要因となっていると推測する。2・3 年生は後期から開始される実習に対する不安や、今までの実習で現場の厳しさ・困難さに直面したことが低下の要因となっていると推測する。4 年生は、それまでの授業や実習の中で、失敗や成功を重ね達成感を得ることで自身が持てるようになったと推測される。

【結論】看護のイメージは、1 年生が最も肯定的であり、学年進行に伴い低下していくという結果が得られた。

特性的自己効力感は、1 年生が最も高く、2 年生、3 年生と低下し、4 年生で再び上昇した。